

「底が突き抜けた」時代の歩き方 376

戦争を変えていく精密兵器によって破壊されていく子どもたち

03.4.15付け讀賣新聞は、《三週間あまりで米英側の全土掌握に至ったイラク戦争は、精密誘導兵器と地上軍の機動性を駆使した点で、世界の戦争史上画期的だった。》として、イラク攻撃でどのような精密兵器が使われたのか、その特集を組んでいる。ワシントン支局の笹沢教一記者は、最新の精密誘導兵器についてこう記している。

《イラク戦争で、米軍は、全地球測位システム（GPS）を駆使した最新の精密誘導兵器を大量に投入し、イラク側を圧倒した。最新の精密誘導兵器は、雨や砂嵐の下で使えなくなる従来の弱点を克服。21世紀の兵器の主力として、1991年の湾岸戦争や99年のコソボ空爆のころと比べ、格段の進歩を遂げたことを証明した。》

戦況を決定づけたフセイン大統領本人に対する4月7日の空爆では、大統領の所在情報を米中央情報局（CIA）が米中央軍司令部に伝達してからステルス爆撃機B1が爆弾を投下するまで、たった45分だった。このとき使われた2千ポンド（約9百キロ）級のバンカーバスター（地上貫通弾）は、最新鋭のGPS誘導装置を有していた。

精密誘導兵器の割合は、湾岸戦争では爆弾全体の約7・5%、コソボ空爆では約3分の1、一昨年のアフガン戦争では約6割。今回は8 - 9割に達する。約十年間で精密誘導兵器とそれ以外の爆弾との比率が逆転したことになる。

今日の精密誘導兵器は10メートル以内の誤差で正確に標的に着弾するため、一つの攻撃目標に2、3発撃ち込むだけで効率的に破壊できる。イラク戦争では、14日までに1万8千発以上の精密誘導兵器が使われた。爆弾の総量は湾岸戦争の20万発よりかなり抑えられたことになる。

今回、イラク側にもGPS衛星の信号を妨害する試みがあった。一方で、米軍は航空機から妨害電波を出し、通信機能をまひさせる技術を確認済みだ。21世紀の戦争は、電子技術力の勝負という側面がますます強まるのは確かだ。》

紙面には、イラク攻撃で使用された主な精密兵器の説明がなされている。

高出力マイクロ波爆弾 電子レンジにも使われる電磁波のマイクロ波を数百万ワットという大出力で発生させ、人を殺傷せずに電子機器だけ使えなくする新型爆弾。「E爆弾」とも呼ばれる。3月25、26日のイラク国営テレビ局への攻撃で使われたと報じられた。

B2 レーダーでの捕捉が困難なステルス技術を備えた大型爆撃機。1機約21億ドルと高価で、米軍のハイテク兵器を象徴。ステルス機としては、このほか、戦闘機F117が開戦初日に、爆撃機B1が4月7日にフセイン大統領の命を直接狙った空爆を実施。

バンカーバスター 地下施設攻撃用に開発された精密誘導爆弾。土なら30メートル、コンクリ

リートでも厚さ6センチまで貫通する。1発約14万5000ドル。フセイン大統領の殺害を狙った開戦初日の限定空爆やバグダッド西部マンスール地区への空爆などで使用。

トマホーク 米の主力精密誘導型巡航ミサイル。全地球測位システム（GPS）の位置情報や、あらかじめ記憶したデジタル画像と実際の風景との照合により目標をとらえる。射程1600キロ。1発約50万ドルで、今回の戦争で14日までに約750発使われた。

これらの精密兵器の説明の欄外には、次のような記事が添えられている。

《フセイン大統領とその政権幹部を狙った4月7日の空爆は、米英軍の高度な情報収集力と精密誘導兵器の威力を世界に見せつけた。米英の持つスパイ、盗聴機器、偵察衛星が総動員され、首都のマンスール地区にある高級レストランでの会合時間まで割り出した。待機していたB1爆撃機から放たれた特殊貫通爆弾「バンカーバスター」4発は、敏腕狙撃手の正確さと、最新兵器の破壊力双方を兼ね備えていた。空爆の成否はなお不明だが、翌8日、政権幹部は一斉に逃走し、9日にフセイン政権は消えた。詳細な真相が判明すれば、中東現代史、世界の軍事史を書き換えることになる一瞬の空爆だった。》

作家の辺見庸が『サンデー毎日』（03.3.30）の連載時評で、《想像すべきは爆弾の下の風景であり、散乱する死骸である。》として、次のように記述を続けている。

《国家はしかしデモテープをメディアに提供して新型爆弾の威力を誇示しても、それによって殺した人間の様を決して見せはしない。たとえば、前次湾岸戦争やアフガン爆撃で米軍が投下した「デージー・カッター」と呼ばれる特殊大型爆弾。一発の爆発でアメリカンフットボール場5面ほどのクレーターをつくるというこの兵器による殺戮の実態は、まさに信じがたい凄まじさゆえに、軍事関係者の間では公言が憚られているという。アフガンで私はそれを入づてに聞いた。「戦闘員も非戦闘員も他の生物もお構いなしに一つの“面”として殺しつくし、死体からは目玉や破裂した内臓が飛びだして、まともな神経ではとても正視できない」と。ところが、このデージー・カッターの破壊力をさらに大きく上回る、非核兵器としては史上最大の爆弾の実験がこのたび米国内でなされた。空中爆発弾「MOAB（モアブ）」である。その爆発の様子をCNNテレビの映像で見ると、地上付近で破裂するといううちはあるものの、巨大な火の玉といい高さ3千メートルものキノコ雲といい、まるで原爆そのものであった。イラク攻撃のために昨年後半から製造が開始されたMOABは、正式には「Massive Ordnance Air Blast」（大空中爆破兵器）の略だが、軍内ではふざけたことに「Mother Of All Bombs」（すべての爆弾の母）の“愛称”で知られているという。人としての想像力は、このMOABが投下されるイラクの人と大地に及ばなくてはならない。

CNNの映像を見ながら私は不快のあまり「こいつらみんな病気だ」と口ごもらざるをえなかった。CNNの記者は、この“改良型”爆弾が大編成のイラク地上軍の殲滅だけでなく地下の軍事施設の破壊にも威力を発揮すると得々と説明した。それによると、ラムズフェルド国防長官はMOABの開発について、目的は「フセインが協力するようつよい圧力をかけるため」「イラク軍の戦意を喪失させるはっきりとした能力を同盟軍

にもたせるため」と語ったのだという。皆が誇らしげで晴れがましい顔をしていた。つまり、すべてが狂っているのだ。アメフト場5面分の空間の生き物をすべて殺すデジー・カッターをアフガンで使用し、それ以上の破壊力のMOABをこれからイラクの人々の頭上で爆発させるというのである。フセインが大量破壊兵器を完全廃棄しないという理由を執拗に強調しながら、その何百倍もの威力の無差別的な大量破壊兵器を実戦使用してイラクをねじ伏せようとする。サルにでもわかるその矛盾と非道をブッシュ味とコイズミらは理解しようとしないう。いま、答えがもっとも容易そうに見える根源の問いほどじつは答が難しいのだ。》

そう、《すべてが狂っている》。映像のなかで超大型爆弾の威力について得々と説明する者や、《誇らしげで晴れがましい顔》をする者たちだけが「狂っている」のではなく、戦争になれば破壊の威力を大きく発揮する爆弾が使われて当然だ、と平然と受けとめてしまっているテレビの前の我々も、《すべてが狂っている》。まあ、すべてが狂わなければ、戦争は遂行されないが、戦争遂行者の狂気を支えているのは、膨大な非戦争遂行者である我々の日常の奥深くに巣くっている、ニヒルな狂気にほかならないということを知っておく必要があるだろう。《すべてが狂っている》ことの一例を、いま世間を騒がせている、12歳の少年が4歳の幼児を地上8階の立体駐車場の屋上から突き落として殺した異常な事件と対比させながら、語ってみる。

どうして我々は、イラク攻撃での殺戮とこの長崎の事件とを無意識のうちに区別して捉え、同じ問題として把握しようとはしないのだろう。12歳の少年による異常な犯罪行為に戦慄する我々はどうして、ブッシュ政権のトップが残虐な殺戮兵器を誇示するその異常な態度に戦慄したりはしないのだろう。一方的な攻撃であれ、戦争ということであれば、どんな残忍で凄惨な行為もたやすく了解してしまうのに、我々の隣家の少年が仕出かす非道な行為には眉を吊り上げて大騒ぎするのはどうしてか。理由ははっきりしている。攻撃はかの遠くの地で行われており、身近な出来事ではないからだ。つまり、我々の日常と遠く掛け離れていると感じられているからだ。だが少年たちが惹き起こす事件は、我々の足下での出来事と思い込まれている。他山での出来事じゃないということだが、ナニ、そう思い込まなければいけないから、そうしようとしているだけであって、本気には自分の足下での出来事などとは思っているわけではないから、衝撃を受けた振りもしてみせるし、事件の度に顔を出す精神分析医やジャーナリストも毎回同じことを語って、少年の事件は次々と繰り返されていく。

《すべてが狂っている》し、すべてがおためごかしなのだ。戦争という非日常な状況下での殺戮は仕方がないけれども、戦場とは異なる我々の生活が維持されている日常性での少年の事件は到底許しがたいなどという、一見分別臭い嘘はもうやめなければならぬ。戦争で殺されようと、少年に殺されようと、殺される者にとっては自らの死に全く変わりはない。だいいち、イラクが攻撃されているとき、我々の世界が攻撃されていると感じない神経そのものが狂っているのだ。非道な事件を惹き起こす少年たちが、世界の各地で繰り返されている凄惨な出来事と切り離されている筈がない。年少の彼らこそ、

国境を越えたメディアの洪水の中で呼吸しているのは間違いない。すべての力を独占しているように見える米国のトップが新型兵器を誇る姿の、イラクを簡単に押し伏せてしまう光景の映像が、全世界の少年たちにおぞましい影響を与えない筈がないではないか。アメリカがイラクにやっているのと同じことを、少し別のかたちで小さくやって何が悪いのか、という声が少年たちの間から音量を増して私には聞こえてくる。

さて、大人が「禁じられた遊び」をエスカレートさせる精密兵器についての説明を続けよう。スポーツジャーナリストの二宮清純が『週刊現代』(03・4・19)の連載読書日記で、「劣化ウラン弾」の残酷さを取り上げている。

《生物兵器、化学兵器を含む大量破壊兵器の廃絶を大義に戦争を始めたアメリカ軍がついに「劣化ウラン弾」の使用を公式に認めた。「劣化ウラン弾」は湾岸戦争でもアメリカ軍が使用した兵器で、その影響と思われる白血病やガンの患者が湾岸戦争以降、イラク国内には急速に増えた。

患者はイラク国内のみならず、アメリカ国内にもいる。危険な兵器と知らされずに使用し、投下地域で戦った米兵が帰国後、次々と体に異変を生じ、白血病やガンで苦しんでいる。アメリカ政府は公式の場でこそ「劣化ウラン弾」の人体に及ぼす被害について否定しているが、少なくない数の医者や科学者は「それ以外には考えられない」とコメントしている。

世界で唯一の被爆国である日本が、なぜ「劣化ウラン弾」の使用禁止をアメリカ政府に求めないのか不思議でならない。なぜ、そこまで卑屈になる必要があるのか。

田中 宇 著『^{さかい}イラク』(光文社新書、本体700円)は戦争が始まる前、約2週間にわたって現地を旅してまとめた最新のイラクレポートである。著者は湾岸戦争で劣化ウラン弾が投下されたバスラにも足を運び、丹念に取材を行っている。

クウェート国境近くのイラク領内で米軍が発射した大量の劣化ウラン弾からばらまかれた放射性物質は、砂漠の砂塵に混じって周辺の村々やバスラ市内に到達し、湾岸戦争が終わった数ヵ月後の1991年夏ごろから、バスラ一帯で放射能の影響と思われる白血病やガン、奇形児の出産が増加した

白血病の治療は複数の薬を組み合わせると効果があるらしいのだが、経済制裁により、薬の輸入もままならない。それでアラブ伝統のハーブ系の薬草を使った治療が試みられているようだが、薬草で白血病を完治させるのは至難の業だろう。

そこで著者は現地の医者コメントを引く。

「アメリカは、劣化ウラン弾をばらまいて子供たちを病気にしただけでなく、薬の輸入を禁じて治療をさせないようにして、無実の子供たちを殺している。薬があれば治る子供たちが死んでいくのを見るのが、医者として一番つらい」

私も一児の父だが、まったくやり切れない話だ。米英両政府は「イラクに自由を」「イラクを解放する」と戦争の大義を声高に主張するが「自由」や「解放」という言葉がこれだけ空疎に感じられたことはない。》

『週刊文春』(03.7.24)には、この「劣化ウラン」についての記事が掲載されている。

《劣化ウラン弾とは、原発など核燃料製造で生じる放射性物質によってつくられた武器だ。核のゴミである劣化ウランは、本来、低レベル放射性廃棄物貯蔵庫に貯蔵しなければならない。しかし、アメリカ政府は70年代からこの負担を軽減するため、兵器製造業者に無償で提供している。/劣化ウランの半減期は45億年。半永久的に毒性が消えないことから、その^{いのしたとし}恐ろしさはわかるはずだ。》この6月にイラクの病気を視察した徳島県立海部病院の井下俊医師によると、《劣化ウラン弾の被害には、急性と遅延性の二つがあります。急性は、被弾して燃え上がる戦車のそばで直接空気を吸うなどして、呼吸困難や肺障害を起こすことです。/怖いのは遅延性のものです。劣化ウランは燃えると、5ミクロン以下の微粒子となって数十キロの範囲に飛散します。空気とともに肺に入り込むだけではなく、畑の野菜、放牧されているヤギ、地下水にも浸透し、それを食べたり飲むことで体内に蓄積され、放射能照射が半永久的に持続されるのです。血中にあると、胎盤を通して容易に胎児に到達しますし、精子に付随して受精する可能性もあります。》

記事によれば、《頭部がない無脳症の赤ちゃん、目や耳がない先天奇形児、そして悪性腫瘍によって体がパンパンに腫れ上がった子供たち》がイラクで産み落とされたのは、湾岸戦後で、《米軍がばらまいた総量320トンの劣化ウラン弾が原因とされ、放射能原子の量は広島に落とされた原爆の一万倍以上といわれる。世界で初めて使用された劣化ウラン弾は、帰国した米兵の家庭にもイラクと同じ悲劇をもたらした。/今回のイラク戦争で、実は湾岸戦争を上回る5百トンの劣化ウラン弾が使用されたという説がある。しかし、米軍は詳細を決して明らかにせず、放射能汚染の実態はなかなか報じられない。今月、自衛隊の派遣を衆議院で可決させた日本政府にいたっては、その危険性すら隠そうとする始末だ。》

記事には、「戦争中、米軍のブルックス准将は記者会見で、『使ったが少量だ』と使用を認めています。それに、劣化ウラン弾の搭載機であるA-10サンダーボルトが戦争に使われていたのは明らかだし、イラク計画省に撃ち込んだ写真もすでに報道されています。本来なら劣化ウランによる放射能汚染は、真剣に調査すべきことです」と語る、6月にイラクを訪問した民主党の首藤信彦衆議院議員と外務省、政府との自衛隊派遣についてのやりとりが、次のように収められている。首藤議員が日本を発つ前、「劣化ウラン弾の影響は大丈夫なの？」と問い合わせると、外務省は「アメリカは、劣化ウラン弾を所有しているが使用していない、と表明しているので大丈夫です」と回答し、6月27日の国会では、「米軍はウラン弾をほんのわずか保有し、その安全性を確信していると述べています」と川口外相が、「国際機関などの調査では、人体や環境に対する影響はほとんどないとの内容がある」と小泉首相が、お揃いで答弁する《"ブッシュの忠犬"ぶりを発揮した。》

イラクに派遣する自衛隊員に「劣化ウラン弾」のなんらかの影響がもたらされるのではないかと、ということが問題なのではない。先の二宮清純が憤慨していたように、《世界で唯一の被爆国である日本が、なぜ「劣化ウラン弾」の使用禁止をアメリカ政府に求

めないのか不思議でならない。なぜ、そこまで卑屈になる必要があるのか。》という問題なのだ。同じ日本人である自衛隊員のイラク現地での「劣化ウラン弾」の人体に及ぼす影響は政治的に心配しても、「劣化ウラン弾」が使用されているイラクに棲み着くイラク人、とりわけイラクの子供たちに対する「劣化ウラン弾」の影響を全く考慮の外に置いているコイズミたちのおぞましさがたまらなくなる。二宮清純の文章の中で書きとめられている、CNNのニュースでのネオ・コンリーダーの、「日本の原爆投下だってあれは解放なんだ。あれで日本人は戦意を喪失し、それ以上の被害を受けずにすんだんだ。あれ（原爆投下）は正しい選択だったんだよ」という発言を目の前にすると、どうやらアメリカが日本人の我々に見舞ってくれた二発の原爆は、日本人の身体を突き抜けて精神にまで深く達していたのだろう。

《5月末、ガイガーカウンターよりも高性能の検知器「ヨウ化ナトリウム・シンチレーター」を使って、イラクで調査を行なった》慶應大学の藤田祐幸助教授は『文春』記事の中で、「バグダッド市内にある計画省の建物の外、主要道路脇に放置された被弾した戦車、バンカーバスターによる爆撃でできたクレーターなどからは、普通の環境の十倍から二十倍の放射能汚染が確認されました。》と証言しているのに、先の井下医師の話では、「イラクではユニセフやその下部組織が、地雷の除去や不発弾の啓蒙ポスターを使った活動を行なっていました。でも、なぜか劣化ウラン弾については無視されていました。私が劣化ウラン弾のことを聞いても、『関知しない』という姿勢で、触れたがらない。」「私はイラク視察中、三つの小児病院を回りましたが、注目に値するのが、五歳以下の小児悪性腫瘍、特に白血病の急増でした。フセイン時代の化学兵器の残留など、他の原因も否定できませんが、非常に有力な原因と考えられるのが、劣化ウラン弾です。バスラの小児ガン専門医、ジャンン博士提供の資料によると、湾岸戦争が終わった4年後の95年から急に増えています。被害が白血病など目に見える形で現れるには、少なくとも3年から5年はかかるからです。同じくジャンン医師の資料によると、2002年、バスラ地区での九歳以下の小児白血病による死者数は単純計算で日本の約5倍にもなっています。ノ白血病の原因はわかっていません。とはいえ、広島やチェルノブイリでも同じ現象が起きています。劣化ウランでいえば、92年、アムステルダムで1500キロの劣化ウランを搭載した貨物機が墜落・炎上し、付近の住民に先天奇形の出生率と白血病が増えている事実があります。」

《政治的な意図からか、アメリカに実質占領されたイラクでも劣化ウラン弾の情報はタブー》になっており、放射性物質の認識がない一般の人々と異なって、知識は豊富だが《薬がないので手の施しようがない》イラクの医師たちの間に漂っている「無力感」を目の当たりにし、イラクを統治しているアメリカ中心のCPA（連合軍暫定当局）に対する砲撃の頻発もあって、《こうした医療設備が復旧されるどころか行政システムも始動しているとは言い難い》中で、井下医師はこう発言を締め括る。

《現在、イラクではストリート・チルドレンが増加しており、劣化ウランで破壊された家屋や戦車に警告や立入禁止措置がなされていない現状では、彼らはそこを格好のねぐ

らにするかもしれません。また、そうした建物を除去する作業の際、劣化ウランを含んだ粉塵により、作業員や周辺住民は被害を受けることになりかねません。汚染状況を明らかにせず放置すれば、被害者は今後も増え続けるでしょう。一刻も早く公的機関による汚染調査と啓発活動を始めなければ、NGOや自衛隊員にとっても危険なのです。

しかし、私はいつも無力感を感じます。2002年にパレスチナの復興支援を行っていた時は、滞在中にインティファダが始まり、イスラエル軍により様々な施設が破壊され、復興支援から緊急支援に逆戻りしました。

結局は政治なんです。ブッシュもシャロンもアラファトもフセインも、そして小泉さんも自分の国の目先の利益しか考えていない。そのために何人の子供たちが命を落としているのか。そのことをもっと考えて、長期的なビジョンを持ってほしい。私はそう思うのです。》

この井下医師の発言には、攻撃に巻き込まれて一方的に殺されていく最も弱い立場の子供たちの視点が含まれているが、世界中で共感を呼んだ米国メイン州在住の13歳の少女、シャルロット・アルデブロン（03.3.27付朝日）全文を次に掲載しておく。

「イラクの子どもたちはどうなるの？」

イラク爆撃というと、何を思い浮かべますか。軍服を着たサダム・フセイン、あるいは銃を持つ口ひげの戦士たち、それともアル・ラシッドホテルのロビーの床に「犯罪者」という言葉と一緒に描かれたジョージ・ブッシュ元大統領のモザイクでしょうか。

でも、考えてみて下さい。イラクの2400万人の国民の半分が15歳より下の子どもなんです。1200万人の子どもです。私みたいな。私はもうすぐ13歳になります。だから、私より少し大きいか、もっと小さな子どもたちです。女の子じゃなくて男の子かもしれないし、髪の毛の色も赤毛じゃなくって茶色いかもしれないけれど、とにかく私みたいな子どもたちです。だから、私のことを見て下さい。よく見て下さいね。イラクを攻撃するときに考えなきゃいけないことが分かるはずですよ。みんなが破壊しようとしているのは、私みたいな子どものことなんです。

もし、運が良かったら、一瞬で死ねるでしょう。91年の2月16日にバグダッドの防空壕で「スマート（高性能）」爆弾に殺された300人の子どもみたいに。そこでは、爆風による激しい火で、子どもと母親の影が壁に焼き付けられてしまいました。

そんなに運が良くなければ、じわじわと死んでいくのでしょう。ちょうど今、バグダッドの子ども病院の「死の病棟」で苦しんでいる14歳のアリ・ファイサルみたいに。アリは湾岸戦争のミサイルで劣化ウランによる悪性リンパ腫ができ、がんになったのです。

もしかしたら、痛みにあえぎながら死んでいくかもしれません。寄生虫に大事な臓器を食われた18カ月のムスタファみたいに。信じられないことですが、ムスタファは25ドル程度の薬で完全に治ったかもしれなかったのに、制裁で薬がなかったんです。

死ななかったとしても、外からは見えない心理的な打撃に悩みながら生き続けるかも

しれません。91年にイラクが爆撃されたとき、小さな妹たちと一緒に生き延びた恐怖を忘れられないサルマン・ムハンマドみたいに。サルマンのお父さんは家族みんなを同じ部屋で寝させました。そうすれば一緒に生き残れるか、一緒に死ねると思ったからです。サルマンはいまだに空襲警報の悪夢を見るのです。

アリみたいに独りぼっちになるかもしれません。アリは湾岸戦争でお父さんが殺されたとき3歳でした。アリは3年間毎日お父さんの墓を掘り返しました。「大丈夫だよ、お父さん。もう出られるよ。ここにお父さんを閉じこめたやつはいなくなったんだよ」って叫びながら。でもアリ、違うの。そいつらが戻ってきたみたいなんです。

ルアイ・マジドみたいに何の傷も負わなくてすむかもしれません。ルアイは、湾岸戦争のおかげで学校に行かなくてもよかったし、好きなだけ夜更かしできたと言います。でも、教育が受けられなかった彼は今、路上で新聞を売ってやっとなんとか生きています。

これが自分たちの子どもたちだったらどうしますか。めいだったら？ おいだったら？

近所の人だったら？ 子どもたちが手足を切られて苦しんで叫んでいるのに、痛みを和らげることも何もできないことを想像してみてください。娘が崩壊したビルのがれきの下から叫んでいるのに、手が届かなかったらどうしますか。自分の子どもが、目の前で死ぬ親を見た後、おなかをすかせて独りで道をさまよっていたらどうしますか。

これは冒険映画でも、空想物語でも、テレビゲームでもありません。これが、イラクの子どもたちの現実なのです。最近、国際的な研究者の一団がイラクに行って、戦争が近づいていることが、向こうの子どもたちにどう影響しているかを調査してきました。

彼らが話した子どもたちの半分以上が、これ以上何のために生きるのか分からないと語っていました。本当に小さい子どもたちでさえ、戦争のことを知っていて、心配していました。5歳のアセムは「銃や爆弾がいっぱい来て、お空が冷たくなったり熱くなったりして、みんないっぱい焼けちゃうんだよ」と言いました。10歳のアエサルは、ブッシュ大統領に「たくさんのイラクの子どもたちが死にます。それをテレビで見たらきっと後悔する」と知ってほしい、と言っていました。

こちらの小学校のことを話します。私は、人とけんかをしたときには、たたいたり悪口を言ったりするんじゃないくて、「自分がどう思うのか伝えなさい」と教えられました。相手の身になったらどう感じるのか、理解してもらうのです。そうすれば、その人たちはあなたの言うことが分かって、やめるようになります。

いつものように私は、どう感じるか伝えたいと思います。ただし、「私」ではなく、「私たち」として。悪いことが起きるのをどうしようもなくただ待っているイラクの子どもたちとして。何一つ自分たちで決めることはできないのに、その結果はすべて背負わなければならない子どもたちとして。声が小さすぎて、遠すぎて届かない子どもたちとして。

明日も生きられるか分からないと考えるとこわいです。殺されたり、傷つけられたり、将来を盗まれると思うと悔しいです。いつもそばにいてくれるお父さんとお母さんがほしいだけなんです。

そして、最後に。私たち、何か悪いことをしたでしょうか。わけが分からなくなっているんです。(訳・藤原泰子)

(文中の数字などは原文のまま)

聡明な少女の、想像力豊かで核心を衝いたこのスピーチを書き写しながら、ここに《何一つ自分たちで決めることはできないのに、その結果はすべて背負わなければならない子どもたち》の抗議の叫びが渦巻いているのが痛く突き刺さってくる。子どもたちが「戦争はよくない」と必ず示す反応に対して、複雑な国際政治の力学が分からない子どもがそう言うのは決まっている。戦争がいいなんて思っている人はどこにもいない、戦争はよくないけれども、戦争によってしか解決できない問題がこの世界にはあるのに、反戦運動にそのような子どもたちの単純な気持を利用するのは卑劣であり、許しがたいという声がよく聞こえてくる。だが、はたしてそうだろうか。確かに大人と異なって、子どもたちは訊かれれば必ず「戦争は間違っている」と応えるに決まっている。しかし、それは国際政治の複雑さが子どもたちにはわからないという理由以上に、シャルロットがいうように、大人たちが決めた戦争のために、どうして自分たち子どもがその最大の影響を被らなくてはいけないのか、という理不尽さへのやりきれなさを子どもたちの言葉の中に読み取る必要があるだろう。

《……とにかく私みたいな子どもたちです。だから、私のことを見て下さい。よく見て下さいね。イラクを攻撃するときに考えなきゃいけないことが分かるはずですよ。みんなが破壊しようとしているのは、私みたいな子どものことなんです。》とシャルロットが繰り返し強調するのは、世界の中に存在しながら自分たちを破壊しようとする武力行使に対する決定権からすべて除外されている「子どもの立場」というべきものである。もちろん、大人であっても武力行使の決定権に誰もが連なっているようにはみえないとしても、選挙権というものによって大人は決定権を有していることになっている筈だ。ブッシュやブレアや小泉を国のトップとして選出したのは、一体誰か。直接選挙であろうとなかろうと、彼らを選出したのは大人の国民であって、子どもは予め除外されている。少なくとも子どもたちは、イラク攻撃に踏み切った彼らを国のトップとして選出してはいないのである。

「戦争は間違っている」と必ず応える子どもたちの単純な考えなどいちいち聞いてどうなるというのであれば、大人たちが惹き起こす戦争の影響をすべての子どもたちが一切被らないようにするか、それともすべての子どもたちにも選挙権を与えて、大人と同等に戦争につながっている政治に参加させなくてはならない。もしどちらも現実的に不可能だというのであれば、《何一つ自分たちで決めることはできないのに、その結果はすべて背負わなければならない子どもたち》の立場の理不尽さが解消される方向に、大人たちが全力を尽くすのは当然ということになる。戦争に限らず、子どもばかりが悲惨な目に遭わされる事態をなくしていくことが、すべての決定権をもっている大人たちの、決定権をもたない「子どもたちの立場」に対する最大の努めではないのか、という叫び

がシャルロットのスピーチから響いてくる。

更に丁寧に耳を傾けると、彼女のスピーチからはまた異なる音色の響きも聞こえてくる。複雑な国際政治の力学というが、そのような国際社会を作りだしたのはすべて大人であって、子どもにその責任はない。だから、同じ世界に大人も子どもも共存している以上、大人が作りだした複雑な政治の仕組みに子どもが単純な感情のみで口出ししてはならない、ということとはとてもいえない。それに、戦争という手段は事態の解決に向かわせるどころか、より一層事態を複雑にしていくことを考えると、大人こそ、子どもたちの唱える「戦争は間違っている」という単純な感情にもっと学ぶ必要があるにちがいない。大人が作りだした国際政治の矛盾を解決するのに戦争をもってするやり方が、より一層矛盾を激化させていくだけであるなら、「戦争は間違っている」という子どもたちの素朴な願いこそが、戦争によらない問題の解決法を示していると考えてもいいからだ。このことは、我々が生き抜くのに世界はもっと単純で素朴であってもよいのではないか、ということをも単純に教えてくれる。

『諸君！』（03・6）には、「劣化ウラン弾」についてももう少し詳しい説明が、東大助手の内藤陽介によってなされている。

《劣化ウラン弾とは、天然ウランの濃縮過程で核兵器や原子力発電所用の燃料となるウラン235（ U^{235} ）を抽出した残りの低レベル放射性廃棄物、ウラン238（ U^{238} 。これが劣化ウランと呼ばれる）を弾芯に利用した砲弾で、実戦で用いられたのは湾岸戦争が最初である。

劣化ウラン弾は鉄や鉛を弾芯とする砲弾と比べて破壊力が強力であるばかりか、貫通時の衝撃で高熱を発して燃焼する。このため、戦車などを破壊し、中にいる兵士を殺すことができるとして、湾岸戦争時の地上戦では、1991年2月24日から28日までの間に、米英両軍あわせて少なくとも戦車から1万個、戦闘機から94万個の劣化ウラン弾が発射されている。

しかし、劣化ウラン弾の脅威は、砲弾が燃焼した際に大気中に飛散する酸化ウランの微粒子の方が深刻で、これを体内に取り込むと肺などにたまり、放射線や強い化学毒性による影響で白血病・癌・奇形などの障害を引き起こすといわれている。》

また、軍事評論家の安藤英彌が『サンデー毎日』（03・3・30）で、イラク攻撃を射程に収めた米軍最新兵器の脅威について記している。辺見庸も言及していた新型巨大爆弾「MOAB」の仕様は《全長9㍎、2万1000㍎（約9450㍎）爆弾で高性能爆薬約1万8000㍎（約8100㍎）を搭載》し、《空中で爆薬燃料をまき散らし、気化爆発させることで周囲を破壊するという巨大爆弾である。01年の対アフガニスタン戦争で世界の耳目を集めた大型爆弾BLU-82、通称「デージーカッター」が1万5000㍎爆弾であることを勘案すれば、控えめに見積もってもその威力は1・4倍、半径1㍎ほどの範囲の建物などを破壊し尽く》し、《外電によれば、実験では3000㍎上空までキノコ雲が立ち上り、50㍎離れた地域でも衝撃波が観測されたという。国防総省は「核兵器以外の通常兵器では最大の破壊力を持つ」とコメントしてい

るが、ある部分、核兵器に匹敵する通常兵器であるとみても差し支えないだろう。》

《デジカッターの発展型であるMOAB》だけでなく、《米軍は、地上で1回爆発した後、さらに地中深くめり込んで炸裂する2段式のデジカッターを開発中という。実は、地中で爆発すると喧伝されたデジカッターも、アフガンの固い岩盤地帯では3メートルほどの深さで爆発してしまい、肝心の洞くつ部分は破壊できないケースが少なくなかった。2段式のデジカッターはその点を改善するため開発されている。》更に一般に、《▶情報▶指揮システム▶火力▶機動力▶防御力▶補給力 - の6要素で構成されている》戦闘力は、そのすべてで米軍がイラクを圧倒しているが、「RMA」(Revolution in Military Affairs、軍事革命)は歴史上、「火薬の発明」「内燃機関の発達」「核兵器の開発」といった三つの大変革を経て、米国では《情報、指揮システムのネットワーク化》に踏み入りつつある。

ベトナム戦争の敗北の原因を分析した結果、《情報収集・情報分析・攻撃計画の立案・攻撃の実施》の統合と、同一のシステムでの全兵器の運用》という結論に辿りつき、その「Network Warfare」の具体的な例として、「JDAM(ジェイダム)と呼ばれる爆弾が紹介されている。《「統合直撃爆弾」の頭文字をとったJDAMは95年に開発された。爆弾そのものは基本的に第二次世界大戦以来の普通の爆弾だが、「誘導尾部キット」という簡便な装置をつけて精密誘導爆弾に変身させた。「誘導尾部キット」は、最新のGPS(全地球測位システム)が組み込まれて軍事衛星と直結。投下前に目標位置をインプットすると、落下しながら可動式フィンが動いて爆弾を目標まで誘導していく仕組み》で、この爆弾の誘導技術によって命中精度が飛躍的に向上し、「ピンポイント」爆弾の正確さも、《対アフガン戦争での1日当たりの出撃機数はほぼ200機だったが、攻撃の目標数は湾岸戦争当時の3000機にまで匹敵したという。単純に計算しても命中精度は15倍に向上した》。

精密誘導爆弾が本格的に使われた湾岸戦争では、《イラク軍の戦死傷者が10万人といわれるなか、米軍を中心とする多国籍軍の戦死不明者はわずかに182人》で、《当時、精密誘導爆弾は全体の9%程度にすぎ》ず、《それが今や、米軍の精密誘導爆弾の保有比率は6割。しかも、そのネットワーク技術はあらゆる兵器に転用されている。》MOABも同様に、《軍用機、艦船、火砲、戦車はもちろん、歩兵用の兵器に至るまでネットワークで結び、《相手のレーダー装置を破壊し尽くすような、電子兵器》のHEM(高エネルギーマイクロ波装置)なども備えて、《いわば相手に姿をさらすことなく、攻撃できるシステムを完成させ》、「戦場無人化」を目指しつつある。《自国の兵員を危険な戦場に赴かせることなく、敵を殲滅する》という、この米国の究極の目的である戦略によって、戦争は《一方的な殺戮戦》と化し、戦争の決定に全く無関係な子どもたちがますます破壊されていくことになるのだ。

2003年7月27日記